

特集②:ミュンヘン・ハイエンドショー

## HIGH END 2014 in Munich

株式会社ディーアンドエムホールディングス CSBU Design Center

出口 昌利

幸運にも 2014 年 5 月 15 日より開催された HIGH END 2014 in Munich に足を運ぶことができたので、その内容を紹介する。

オーディオ不況と呼ばれて久しい昨今ではあるが、Munich の HIGH END はそれを全く感じさせない熱気と活気に満ち溢れていた。1F のデバイスメーカーがひしめくフロアから、2F のオーディオメーカーのブース、3F のハイエンドのフロアの隅々まで、多くのお客様でごった返し、至る所で試聴や新製品の紹介・商談が繰り広げられていた。オーディオ色の雰囲気かと思いきや、通路や中庭には喫茶や Bar が設置されていて、まるでオーディオを中心としたお祭りのような賑わいであった。



活況を博した会場

老若男女問わず来場されており、改めて EU 市場におけるオーディオ人気の高さを象徴するショーであった。日本のショーしか体験したことのない筆者にとっては、それがとても新鮮で、製品の作り手としても喜びと期待を胸に抱きながら、少々興奮気味で様々な展示物を見て回った。

さて、私たち D&M のブースを含むオーディオメーカーの展示内容に目を向けてみると、これまでとは明らかに違う新しい流れを感じたので、そちらを紹介していきたい。

最も興味深いのは、どのメーカーもいわゆるフルサイズのオーディオコンポーネントを数多く展示している一方、ハーフサイズやそれ以下のサイズのコンポーネントの出展数が明らかに増えていることである。それらは、サイズが小さいといえども作りは堅牢で、微塵の安っぽさも感じ得ない。どれも完成度が非常に高く、作り手の熱意が感じられるものばかりだった。私たち D&M も、Desktop Audio の品種で「DA-300USB」「PMA-N2」などの新製品を展示していたが、こちらでも非常に好評で、HIGH END に出展するメーカーの多くが、同様の新製品のラインナップを増やしている傾向がはっきりと見受けられた。



D&M ブースの Desktop Audio 展示



各社の小型、薄型オーディオ

この流れを鑑みると、近い将来、ライトユーザーからミドルユーザーの多くが、こういった新しい製品に興味を示し、オーディオの形・在り方が変化していく、今はその過渡期の最中にあるのではないかという印象を持った。現在、私たち作り手側は、ユーザーがどういった製品を求めているのかを研究し新製品をユーザーに提供し始めたばかりの段階で、今後も試行錯誤を重ねてユーザーの希望に対する答えとなる製品を創造していかねばならない。音を愛し音を楽しめる、新しい潮流に合った新製品をいち早く市場に提案していくことが我々の急務である。

一方で、近年製品ラインナップが急速に増えてきた Bluetooth Speaker についても D&M だけではなく、引き続き多くのメーカーが出展している活気ある製品カテゴリであった。



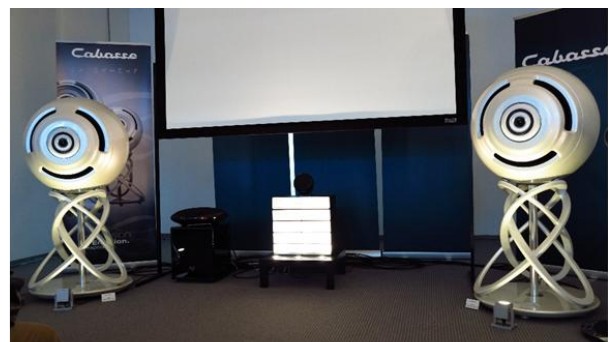
カラフルな Bluetooth Speaker (デノン)



小型 Bluetooth Speaker

色・形やデザインはどれも個性的だが、やはりどのメーカーにも共通する一番の訴求ポイントはオーディオメーカーらしい音質の良さである。これらに関しては、使い勝手の良さや携帯性が重視される一方、特に我々には優れたデザインや価格以上の音質も期待されている。今後のオーディオ市場は、このような携帯型製品から、Desktopでも使用できる小さなサイズであっても、デザイン性と音質に優れたコンポーネント、そしてこれまでのハイエンドをTopとしたフルサイズコンポーネントと、様々な形態の製品が個々のユースケースに応じて求められる時代であることは間違いない。製品の多様化の必要性を意識せざるを得なかった。

多様化が進む一方で、その潮流には全く乗っていないのがスピーカーである。アンプやプレーヤーが例え小型であったとしても、スピーカーは小さくてもブックシェルフの大きさを維持しているし、相変わらずトルボーイの人気も高い。



スピーカー及びハイエンドオーディオ機器

ハイエンドフロアには、天井にも届きそうな超大型のスピーカーが接続・セッティングされ、独特のデザインが光るスピーカー等が多くの来場者の関心を集めていた。少なくとも現在のEU市場においてスピーカーに求められているものは音の質そのもの、そして家具としてのインテリア

性にあることは間違いなさそうだ。プレーヤーやアンプに新しい流れがありつつも、最終的な音の出口は確固たる歴史に下支えされたスピーカーが求められていて、これぞオーディオの世界と考える非常に面白い現象であると感じる。

最後に、なかなか厳しい時代の続くオーディオ業界ではあるが、私たちの製品を愛してくれるお客様は確かに存在して、その方々に感動を提供していることは紛れもない事実である。そういったお客様がいてくれる限り、更なる感動を与えられる新製品を提供していくことこそが、私たちの仕事の生き甲斐であり、また、喜びを生むことでもあると改めて実感した。

#### 執筆者のプロフィール

出口 昌利（でぐち まさとし）

2008年 国立大学法人 電気通信大学大学院 情報システム学研究科 修了

同年4月 株式会社ディーアンドエムホールディングス 入社

以降 DENON Hi-Fi プレーヤー・アンプの電気回路設計に従事

代表モデル：DCD-SX1, DCD-1650RE 等